慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Yukihiro Ikeda, Die Entstehungsgeschichte der "Grundsätze" Carl Mengers
Sub Title	池田幸弘著 Die Entstehungsgeschichte der "Grundsätze" Carl Mengers
Author	八木, 紀一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1998
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.91, No.3 (1998. 10) ,p.551(175)- 554(178)
JaLC DOI	10.14991/001.19981001-0175
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19981001-0175

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」91巻3号（1998年10月）

書評

Yukihiro Ikeda

Die Entstehungsgeschichte der "Grundsätze" Carl Mengers

Scripta Mercaturae Verlag
St. Katharinen 1997年, 218頁

私が本書の著者、池田幸弘さんにはじめてあったのは、本書の研究対象であるカール・メンガーの文庫が置いてある一橋大学の社会科学古典資料センターであった。まだ池田さんは大学院生で、センターの司書か助手が、メンガー研究の同好の士がいますよとか言ってひきあわせてくれたような気がする。一橋大学の昔の偉い先生は、メンガー文庫があるからメンガーを研究しようというような狭い了見をもつべきではないと言ったそうだが、幸いにして、私たちは二人ともよそ者だったので、そんなことを気にせずに、まずはメンガー文庫からメンガーの研究を開始した。スタートの時期は私の方が早かったが、私が断続的に研究をしていたのに対して、若い池田さんは集中的に研究をおこない、私の研究では空白になっていたいくつかの部分を埋めるとともに、メンガー『経済学原理』（Carl Menger, *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre,* 1871）の生成過程についての自らの像を完成した。それでも10年以上かかっているだろう。ドイツ語で書かれているために、その成果が英語圏や日本の経済学史家の共通知識になるには、なお時間がかかるかもしれない。そうだとしても、本書（『カール・メンガーの「原理」の形成史』）が出現したことによって、ハイエクのメンガー伝1篇[(1)]だけに依拠したようなメンガー論は、安直さをもって非難されても仕方がないものになったことは明らかである。

同じオーストリア学派のベーム=バヴェルクについても同じことが言える[(2)]と思うが、メンガー研究は、資料の探索と活用という専門的レベルでの実証的経済学史研究が何をなしうるかのモデル・ケースであったような気がする。その際、問題提起者として方向を示したのは、つねにヴィーン大学の（メンガーの講座の継承者と言ってもいい）エーリッヒ・シュトライスラーであった。ほぼ20年前に研究をスタートした私の場合には、メンガーが新古典派に吸収されない独自性をもった理論家だという限界革命100周年の際の彼の主張[(3)]が研究の方向を与えるものであった。池田さんの場合には、デューク大学のパーキンス・ライブラリィ

（1） Friedrich A. Hayek, "Carl Menger" in : *Collected Works of Carl Menger,* ed. By F. A. Hayek, vol.1, *Series of Reprints of Scarce Tracts in Economics and Political Science,* vol. 17, London, 1934 ("Einleitung", in : Carl Menger, *Gesammelte Werke,* hrsg. von F. A. Hayek, Bd. 1, Tübingen : Mohr, 1968, また、翻訳として、一杉哲也訳「メンガー論」、スピーゲル編『経済思想発展史』第3冊、東洋経済新報社、1954年所収がある。). この「序論」はハイエクがメンガーの息子 Karl Menger の提供した資料をもとに執筆したものと考えられ、「メンガー文書」の調査によってその記述が裏付けられた部分もある。しかし、理論的伝統に乏しい環境下での理論創造の苦闘、あるいは、市場ジャーナリストの経験から新理論の発見にいたったという「神話」に信憑性が無いことは、本書が力説しているところである。

（2） Shigeki Tomo, *Eugen von Böhm-Bawerk, Ein größer österreichischer Nationalökonom zwi--schen Theorie und Praxis,* Metropolis, Marburg, 1994.

（3） エーリッヒ・ストライスラー「オーストリア学派と限界主義」（美濃口武雄訳）、コリソン・ブラック他編著、岡田純一・早坂忠訳『経済学と限界革命』日本経済新聞社、1975年。

に「メンガー文書」が寄託された前後に、シュトライスラーがメンガーの経済理論のドイツ（オーストリアほかを含むドイツ語文化圏）的背景を強調した[(4)]ことに示唆を与えられているように見える。本書の章のタイトルに出てくるのは、ペーター・ミシュラー、ヴィルヘルム・ロッシャー、カール・ハインリヒ・ラウの3人であるが、本文のなか（とくに第4章）ではそれこそ無数のドイツ人経済学者の著作が登場している。池田さんは、財、欲望、価値、価格形成、経済学方法論といった諸点について、これらの著作とメンガー『原理』との関連を、細かな表現上の異同をも含めて探求している。これは、手稿その他の第一次資料を活用したこととともに、専門的な経済学史的研究としての本書の価値を高めている。

第1章は、研究状況と課題設定をおこなう章であるが、その要点はすでに言及したように、新資料を利用しつつ、ドイツ経済学のなかにメンガー『原理』を位置づけることにある。ひきつづく2章（「第2章　ヴィーンとプラーク（1859-1863）の学生時代」、「第3章　カール・メンガーのジャーナリスト活動(1863-1867)」）は、それぞれ学生時代とジャーナリスト時代を取り扱ったものだが、主眼は『原理』との関連におかれている。第2章では、メンガーがヴィーンとプラーク（プラハ）で大学時代に受講した講義課目が示されている。これは、第3章で紹介されている1865年から67年にかけてのクラカウでの学位取得の事情とあわせて、経済学研究を本格的に開始する前のメンガーの素養を示す有益な情報である。シュトライスラーは学生時代のメンガーはプラークで教えていたミシュラーに影響を受けていると主張したが、私は、メンガーの自由主義的性向からすれば、保守的カトリックのミシュラーよりはレオポルト・ハスナーの方が適合しているように思ったことがある。しかし、ハスナーの講義は一度も選ばれておらず、ミシュラーの講義は「国家経済学」「財政学」「国民経済政策（国家経済学）」と3ゼメスターにわたって受講されている。第4章や5章での池田さんの説明を読むと、ミシュラーはディシプリンとしての経済学についてのしっかりした見識をもっていたことがわかる。後に経済学者となったメンガーにとっては、政治的野心をもっていたハスナーではなく、学究的なミシュラーに就いたことは、結果的には幸運な選択であったかもしれない。

しかし、「メンガー文書」に残された「備忘録」での学生時代についての記入[(5)]から推察すると、プラーク大学でのメンガーは当時の政治・社会情勢（まだ初期段階とはいえ民族問題を背景としたそれ）を反映した活動的な学生であったと思われる。そうでなければ、プラーク大学を卒業したときに、当時ガリチア州のレンベルク（現ウクライナ領リュボフ）のドイツ語新聞から編集者としての職を提供されることは無かったであろう。メンガー在学時（1860-63）のプラーク大学の学内政治事情まではわからないが、1860年代前半のこの時期は、帝国議会（ライヒスラート）と州議会（ラントターク）が開設され、政治運動とともにジャーナリズムが急速に発展した時期である。このことを説明すれば、第2章の学生時代から、第3章のジャ

（4）Erich Streissler, "The Influence of German Economics on the Work of Carl Menger and Marshall", in : Caldwell, B. J. ed., *Carl Menger and His Legacy in Economics* (Annual Supplement to Volume 22, *History of Political Economy*), Durham, 1990 ; "Carl Menger, der deutsche Nationalökonom", in : Schefold, B., hrsg., *Studien zur Entwicklung der ökonomischen Theorie X (Schriften des Vereins für Sozialpolitik,* Bd.115/X), 1990.

（5）「備忘録」というのは、デューク大学パーキンス・ライブラリィの「メンガー文書」にあるTagebuch「日記」(Box21) であるが、記入開始日は1875年なのでここでは「備忘録」とした。

ーナリズム時代を統一的に捉えることができたと思う。

第3章では、レンベルクからヴィーンに出たメンガーが、『ヴィーナー・タークブラット』その他の編集者として活躍したことが記述されている。メンガーの「備忘録」にそのタイトルがあげられている小説『ヴィーンの永遠のユダヤ人』のストーリーについて、私はかねてから知りたく思っていたが、その望みも達せられた。池田さんの紹介によれば、これは銀行家として成功したユダヤ人の社交圏のなか、恋愛にからんでおこる殺人をとりあげたもので、華やかな世界のなかでも消え去らない孤独感あるいは追放感が基調になったもののようである。この小説のタイトルは、池田さんが指摘するように、1840年代のユージーヌ・シューの流行小説に重ねあわされたもので、読者獲得のための娯楽読み物だということははっきりしている。編集者自身が営業政策上、執筆連載した小説が、どれほど執筆者の生い立ちや思想を語っているかどうかについては、留保は残らざるをえないであろう。

第4章以降は、既に述べたように、ドイツ経済学の背景とともにメンガー『原理』の形成を論じた部分であり、その構成は次のようになっている：

第4章　19世紀ドイツ経済学における財および価値の理論

第5章　経済理論の学説史におけるミシュラーの『経済学原理』

第6章　ロッシャーの経済学の影響史について

第7章　1867年から1871年のカール・メンガー：ロッシャーの『基礎』との対質

第8章　ラウの『国民経済学原理』とメンガーの『原理』の成立史

第4章は、メンガー『原理』の形成という本書の基本関心から離れても、この時代のドイツ経済学の価値論についての有益なイントロダクションである。第6章も、歴史学派の始祖と位置づけられるとともに、ラウ（のちにA・ヴァグナーによって改訂される）のそれとともに双璧をなす経済学教科書の著者であったロッシャーについてのバランスのとれた像を提供している。

しかし、この本書後半部分の中心的な問題は、やはりメンガーの価値論の起源であるので、書評の残りの部分もそこに集中しよう。ドイツ経済学においては、財は人間の欲望充足の能力（「使用価値」）においてとらえられ、人間の側からするその評価が「価値」とされる。問題は、シャツなり靴なりの特定種類の財が一般にもつ「類価値」と、個々のシャツ、靴に対して与えられる「具体的価値」あるいは「個別価値」を区別することである。ジェヴォンズ風にいえば前者は、特定種の財の「全体効用」にあたり、後者は「最終効用」＝「限界効用」にあたる。この両者は、後者の「支配可能財数量」への依存関係の認識があれば分離できる。メンガーはこれを「数量法則」と呼んでいるが、別名ではゴッセンの第一法則である。池田さんは、その認識が、（ミシュラーにも）ロッシャーにもラウにもあることを指摘している。しかし、ロッシャーやラウは、各種の価値概念を並べて詮索するにとどまり、人間の経済行動に直接かかわるのは個々の財の価値のみであるというメンガーの明晰さに到達しなかった。問題は、不要な概念を切除するオッカムの剃刀と、既に存在している要素的な認識を、価格形成の理論にまで組み立てる構想力であろう。

池田さんは、本書後半の5章によって、メンガー『原理』を構成する基礎的な概念群が、19世紀のドイツ経済学で準備されていて、『原理』を生みだそうとしているメンガー自身が直接それらを参照した可能性のあることを示して、《メンガー＝ドイツの経済学者》というシュトライスラーのテーゼを立証することに努めた。しかし、その作業が精緻であればあるほど、また説得的であればあるほど、メンガーの独自性がぼやけていくという印象を否定できない。メンガーの像をはっき

りさせるためには、シュトライスラーのテーゼに対するアンチ・テーゼも必要だったのではないだろうか。

この点に関して、本書には二つの関連した指摘がある。第一は、ロッシャーやラウは主観的な価値概念をとりながら、なおかつ古典派的な生産費説を多くの点において採用していたということである。高次財（生産財）の価値は低次財（消費財）のそれから引き出されるものであるとするメンガーには、そのような曖昧さはない。そうすると、古典派的生産費説への考慮を原則的に拒否したことが、メンガーの一貫性をつくりだしたことになる。池田さんの見解をこのように解していいのだろうか。第二は、ロッシャーなどの歴史学派の経済学者は経済活動が倫理的要素に依存するものとしていたが、『原理』形成期のメンガーはそれを一概に否定はしないものの、慎重な立場をとっていたということである。この慎重さが、歴史学派の概念的混乱からメンガー理論の純粋性を守ったと言えるかもしれない。しかし、池田さんの解釈は、たとえ一定の留保はあっても、倫理的要素の経済への影響を考えること自体が、当時のメンガーの思考が歴史学派の枠内にあったことを示しているというものである。

私もまた1867年秋にはじまる手稿群を調査したときに、メンガーが生産費の概念を用いていたり、経済学における倫理的要素について考えようとしていたことを確認した。しかし、1871年の『経済学原理』にはこの二つの要素は含まれていない。この二つの要素の消失（あるいは一時的潜伏）という問題は、『原理』とそれに先行するドイツの経済学との関係を論じる際の最後の関所のようなものではないだろうか。

本書は1871年の『原理』以降のメンガーについては対象としていない。しかし、『原理』刊行後約10年を隔てた「方法論争」においては、（少なくともドイツ歴史学派に対しては）私のいうところの「アンチ・テーゼ」がメンガー自身によって提出される。メンガー自身も自分の独自性については、『原理』執筆以降の歴史学派との対立のなかで認識を深めたのかもしれない。もちろん、「方法論争」やオーストリア学派の形成についても、「ドイツ経済学」というシュトライスラー的な枠を設定することも可能である。池田さんのメンガー研究は、『原理』以降にも進むであろうが、そうした研究の第二段階においても、なおシュトライスラー・テーゼが有効なのか、それとも、アンチ・テーゼの方が優勢になるのであろうか。おそらく、両者の相克のなかでメンガー像、オーストリア学派像が確定していくのであろう。

八木紀一郎
（京都大学大学院経済学研究科教授）